

# 「第28回世界結核デー記念国際結核セミナー」に参加して

名古屋市健康福祉局健康部

感染症対策課 竹田 映梨子

令和6年3月8日に第28回世界結核デー記念国際結核セミナーがWEBにて開催されました。今回のテーマは、「低蔓延化時代の結核ハイリスクグループへの結核医療と予防」で437件のアクセスがありました。

はじめに特別講演として、DZK（ドイツ結核対策中央委員会）のBrit Haecker先生からドイツの対策についてお話いただきました。ドイツの結核罹患率は2000年代初めには低蔓延国水準に達し、2021年には4.7となりました。しかし、2022年にはウクライナ難民等の影響で微増し、多剤耐性結核も3%から6%に倍増。今後も外国出生者による罹患率や多剤耐性結核患者数の増加が懸念されているということでした。一方、首都ベルリンではホームレスの結核患者が年間30～40人発生しており、積極的な患者発見、薬物乱用を含む精神疾患合併患者に対する医療能力や最短の治療レジメン、様々な母国語に対応できる翻訳サービス等が重要な戦略であると紹介されました。

後半は、「日本国内における結核脆弱者層の課題と対策」というテーマでワークショップが行われました。

新宿区保健所の安部雅子先生からは、患者の早期発見を目的として、区内に45校ある日本語学校の学生やホームレスを対象として実施されている健診についての紹介がありました。また、繁華街で働く若者の事例で、コンプライアンスの低い結核患者に対し、同行受診や「飲みきるミカタ」を用いた患者の負担感を最小限に抑えたDOTSにより、治療完遂に向けた支援を行ったという報告がありました。

大阪市西成区の霜村竜匡先生からは、西成区特区構想における結核対策の柱の一つである「服薬支援の充実」に対する取り組みについての紹介がありました。区内で特に罹患率の高いあいりん地域では、自宅や地域内の施設等、患者の意向に沿った場所で基本的に週5日のDOTSを実施されており、入院治療が不必要な

ホームレス患者への治療中断防止策として、住み慣れた地域の施設を活用した療養場所を提供（人との関係構築が難しい患者が個室で療養できる体制も整備）して支援されていることを報告されました。

東京都福祉保健財団城北労働・福祉センター健康指導室の高柳喜代子先生は、山谷地区の日雇い労働者の医療支援を目的とした、生活保護受給要請者の集団生活等を見据えた結核健診や、結核患者へのDOTS事業について報告されました。2014年からの10年間で、7,497件の胸部X線を実施され、37名の活動性結核を発見されたこと、脆弱者層の支援だからこそ当事者を尊重し、治したいという気持ちを促すこと、治療中断となっても決して責任を抱え込まないことが大切であるというお話が大変印象的でした。

関西大学社会安全学部の高鳥毛敏雄先生からは、近年の結核脆弱者層は、ホームレス者から外国人労働者や後期高齢者等様々な生活困難者へと広がっており、支援者はコホート検討会を活用して結核対応力を向上させていくこと、外国人患者の増加に対しては結核高負担国を直接支援していくことが重要であるというお話がありました。

結核が脆弱者層に偏在する今日、いかに患者を排菌前に発見し、治療完遂に導くかが重要な課題であると再認識する機会となりました。本市においても、令和5年度から、日本語教育機関の学生や教員を対象とした結核健診にワークショップ（クイズ等を用いた参加型の講座）を併せて実施する事業を開始しました。また、生活様式に応じた患者中心のDOTSを推進するためのチャットルームを開設しました。今後も、様々な脆弱者層が結核を理解するとともに、適切な時期に定期健診を受診できる体制と、発見された全ての患者が治療完遂できる、個別のニーズに沿った支援のあり方について考え続けていきたいです。☺